

# 幼児期の欲求場面における身体表現による 母子間のコミュニケーション

高野 牧子

## 要 旨

言葉によるコミュニケーションが未発達な幼児期に、子どもとコミュニケーションがうまくとれず、悩む母親が多い。母親は子どものノンバーバルな表現からもその欲求や思いを理解していくことが必要である。本研究は母親が子どもの発する日常のノンバーバルな表現をどのように理解しているのか明らかにすることを研究目的とした。母親 92 名へアンケート調査を実施し、子どもの欲求場面である「空腹」「睡眠」「排尿」「排便」「遊び」において、子どもがどのように訴えるか具体的に尋ねた。はじめに月齢による身体表現と言葉によるコミュニケーションの発達の諸相をつかみ、次に母親の全記述 554 件を動きの分析に優れたラバン理論の視点を援用した 5 つのカテゴリー「身体部位」「動作」「ダイナミクス」「空間性」「関係」に「言葉」「特になし」を加えて 7 カテゴリーに分類し、欲求場面での母親が理解する子どもの表現の特徴や傾向を検討した。

その結果、動きによる表現を経て言葉での表現への発達には 3 つのパターンがあり、「空腹」「遊び」は急速に言葉による表現へと発達していくのに対し、「睡眠」は言葉への発達が鈍く、「排便」「排尿」は遅れるという発達の順序性がみられた。

また各欲求場面に応じて子どもの表現に一定の傾向や特徴が認められた。「空腹」では象徴的身振りや実際に食べ物のある「空間」への移動、「睡眠」では「目をこする」「寝る」「暴れる」などが特徴であった。「排尿」は言葉による訴えを主とし、動きからの感じ取りが少ない傾向であった。「排便」は「隠れる」ことが特徴であり、「遊び」は直示的身振りの他、「手を引っばる」「物を持ってくる」など、直接母親への身体接触を伴って訴えてくることが多い。つまり、子どもが該当の「身体部位」に触れる、特徴的な「動作」をする、欲求するものがある「空間」へ移動する、「関係」を求めることは、母親にとって、とても理解しやすい子どものノンバーバルな表現であった。一方、動きの時間性や力性から生まれる表現的な質「ダイナミクス」に関する記述は非常に少なく、子どもの動きの様子から感じとることがあまり行われていないのではないかと推測された。

キーワード：ノンバーバル・コミュニケーション、母子間、欲求場面、ラバン理論

## 1. 研究目的

言葉の発達が未熟な乳幼児期において、身体表現は重要なコミュニケーションの手段である。しかし、子育て支援活動では、「泣きじゃくっていて、何が言いたいのか分からない」「何を言いたいのか、要求がわからない」といった悩みが多く寄せられ、子どもとコミュニケーションがうまくとれず、悩んだことがあると訴える保護者も多い。小原（2005）は母親の情動共感性と育児困難

感との関連について、30 枚の乳児の表情写真を母親に呈示し、その写真を通して、母親が乳児の感情をどう読み取るか（日本版 IFEEL Pictures）という反応特徴から、母親の情緒応答性を把握し、検証した。その結果、1 歳児を持つ母親の育児困難感には、母親の情緒応答性が関連していることを示し、母親の育児困難感は、母子相互作用から生じる情緒応答性が関連要因となる可能性を示し、非常に興味深い研究である。

（所 属）

山梨県立大学 人間福祉学部 人間形成学科

小原の研究は、子どもの顔写真によっており、その表情をどのように母親が読み取るのかを対象にしている。しかし、コミュニケーションは表情だけではなく、身体の動きによる表現も大きな役割を果たしていると考えられる。

さて、分析対象とする身体表現について、柴(1993)は意識的・無意識的な身体表現を広義の表現として捉え、表情や姿勢、無意識の身振りによる表出を無意識的な身体表現、狭義の表現として舞踊を意識的な身体表現と定義している。幼児の表現を分析するにあたり、幼児が意識しているか、無意識であるか、特定が困難である。そこで、本研究では身体表現を広義の表現として、意識、無意識に関わらず、現象として母親が気づいたすべての身体による表現を身体表現として広く捉え、進めていくこととする。

喜多(1997)は「まだことばが十分発達していない子どもの身振りは、社会的に共有された記号としてのコミュニケーションを支える。さらに身振りは一語発話期から二語発話期への過程においても重要な役割を果たす。ひとたび単語と単語の組み合わせを学び、ことばが社会的に共有された記号によるコミュニケーションをになうようになると、身振りの社会的役割は低減され、それは、からだ的思考の場として機能しはじめる」(p.68)と子どもの身振りと言葉の発達についてまとめている。

さらに喜多(1997)は身振りを「直示的身振り」と「象徴的身振り」の2つに大別して考えている。「直示的身振り」は指差しや手差し、指たてのようなからだの一部を伸ばしてある方向を指し示す身振りである。一方、「象徴的身振り」は身体の動きそのものが何か別のものを表現する身振りである。このような身振りを含め、乳幼児は表情や姿勢、様々な動作など、自分の身体を媒体として自分の欲求や感情を表現し、他者とコミュニケーションしている。

本研究では、従来研究されてきた子どもの言語獲得という視点ではなく、養育者(主に母親)の立場から、子どもが発する日常の身体表現のどこに着目し、理解しているのか、母子間の身体表現

によるコミュニケーションから検討していきたい。母親が子どもの身体表現に最も気づきやすいと考えられる場面として、子どもの生理的欲求場面を中心に取り上げることとする。はじめに、月齢による身体表現と言葉によるコミュニケーションの発達の諸相をつかみ、次に各場面で母親が記述した表現傾向を、動きの分析に優れたラバン理論の視点を援用して分析し、場面による身体表現の特徴や傾向を広く把握していくことを研究の目的とする。得られた結果より、子どもの身体表現を母親がどのような視点から見て、子どもの意図を理解し、あるいは、どのような視点が欠落して意図をくみ取っていない恐れがあるのか、検討していきたい。子どもの身体表現の傾向や理解する視点の提示により、母親が子どもを感じる力、理解する力を促進し、母親への子ども理解支援につながることを期待している。

## 2. 研究方法

山梨県内(甲府市、山梨市、富士河口湖町)の子育て支援講座に参加した親子にアンケート調査を実施した。

第一期調査(2005年)

対象者 親子 68組/男児 41名/女児 27名  
(4ヶ月~35ヶ月)

第二期調査(2007~2008年)

対象者 親子 24組/男児 10名/女児 14名  
(13ヶ月~24ヶ月)

質問は次のとおりである。

Q1: 次の各場面でお子さまはどのようにお母さまへ気持ちを訴えますか? 言葉以外の場合、どのような身体部位で、どのように表すのか、なるべく具体的にお書き下さい。

- ① お腹すいた(空腹)
- ② 眠い(睡眠)
- ③ おしっこがしたい(排尿)
- ④ ウンコがしたい(排便)
- ⑤ 遊びたい(遊び)

の5場面とした。(以下、各場面については( )内の表記とする。)

### 3. 結果および考察

#### (1) 月齢による発達

第一期調査の自由記述を分類し、喜多が指摘する発達過程を基に、「何も表現しない」1点、「動きで表現する」2点、「動きと言葉で表現する」3点、「言葉で表現する」4点と点数化し、場面ごとに回帰直線を求め、月齢による推移を図1に示した。

その結果、大きく3つのパターンが認められた。第1のパターンは急速に「言葉」での表現に発達していくものであり、「空腹」と「遊び」がこれにあたる。「空腹」の場面では月齢の幼い時には「動き」で表現する子どもが多く、「動きと言葉」での表現を経て、「言葉」への表現へと急速に発達していく。「遊び」についても、「空腹」に追従して、同様に「言葉」による表現へと急激に発達していく。

これに対して、「睡眠」は第2のパターンと考えることができる。12ヶ月くらいまでは、他の場面に比べ、「何も表現しない」とする母親が少なく、月齢の幼い時より、「動き」や「動きと言葉」による表現が多い。しかし、「言葉」での表現への急速な発達が見られず、「動き」または「動きと言葉」による表現に留まる傾向が見られた。これは眠い場合、そのまま寝てしまうことで、欲求が充足されるため、「言葉」による表現へと向かう必然性が弱いと考えられる。

第3のパターンは「排尿」「排便」である。これらは共に「何も表現しない」という段階から、次第に「動き」での表現、「動きと言葉」そして「言葉」での表現へ発達していくが、「空腹」や「遊び」からは遅れて発達していく。また2歳を越えて、わずかに「排便」の方が「排尿」に比べ、早く発達する傾向がみられた。

34ヶ月の段階では「空腹」「遊び」「睡眠」「排便」「排尿」という発達の順序性が認められたが、個人差も大きく、今後さらに詳細に検討していきたい。

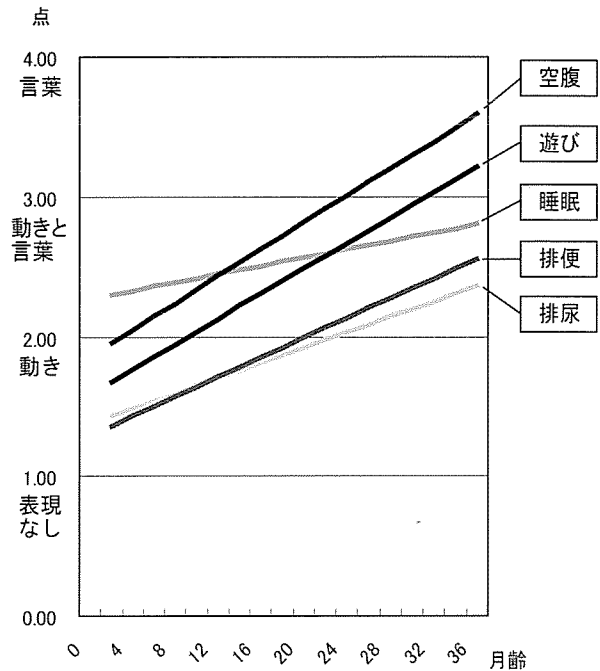


図1 場面における表現推移

#### (2) 場面毎に見る身体表現

##### ①「空腹」

「泣く」(4ヶ月、以下、数字は月齢)に始まり、「お腹すいたと言いながら、お腹をこする」(26)「お腹を押さえる」(28)など、身体部位を触って表現する方法や、「指を指す」(26)や「棚の上や机の上のものは指差して欲しがらる」(27)など、「直示的身振り」もあった。さらに「手で食べるマネをして「あむちょうだい」「あむしたい」といいます」(26)「お茶の時はコップで飲むジェスチャーで教える」(23)「ごはんを食べるしぐさをし、そして泣く」(23)など「象徴的身振り」も挙げられ、「空腹」場面の特徴と考えられる。

##### ②「睡眠」

「目をこする」(26)「あくび」(26)「ごろんと横になる」(31)「床の上をごろごろしだす」(27)と眠いことが明らかな直接的な身体表現に対し、「イライラして訳のわからない行動をとる」(31)「ぐずる」(34)「あばれだす」(31)など、暴力的な身体表現も多くあった。また「おっぱいを欲しがらる」(26)「だっこしてと甘える」(24)「抱きついたり、おんぶして欲しいとせがむ」(34)など

のようにスキンシップを求める身体表現も多い。入眠儀式に必要な物との関わりから、「お気に入りのタオルを探す」(29)「いつも持っている布を欲しがる」(33)などもあった。

### ③「排尿」

「おしりをさわる」(26)「股を押さえてちいーと言う」(24)など、身体部位に触れる表現が挙げられた。また「指差す」とした「直示的身振り」もあった。「もじもじする」(27)などの身体表現を挙げる母親が少なく、その一方「まだ教えない」「まだ言わない」とする記述が多い。トイレトレーニングの時期は「言葉」で教える、伝えることに母親の関心があり、子どもの身体表現を見落としている可能性があるのではないかと推察される。

### ④「排便」

「排尿」と同様に「おしりをさわる」(26)など身体部位に触れる表現の他、「動きが止まって一点を見つめる」(26)「じっとしている」(34)など、排便中の静止状態を挙げる記述もあった。また「決まった場所へ行ってしゃがむ」(28)「誰もいない部屋や静かな所に隠れる」(34)「物陰に隠れる」(26)など、空間に関わった身体表現が記述された。隠れる動作が現れることは他の場面にはなく、恥ずかしさに関わって特徴的であり、興味深い。

### ⑤「遊び」

「本やおもちゃを持ってくる」(34)「くつを持ってくる」(31)「足にまとわりつく」(35)など親へ直接的な関わりを求めてくることが多い。また「外を指差す」(23)など「直示的身振り」の他、「手を引っ張り連れて行こうとする」(26)など、親を引っ張って目的の方向へ向かわせようとする記述はとても多かった。この他「玄関に自分のバックを持っていく」(29)「出かけた時には自分からTVを消したり、コタツのコンセントを抜いたりする」(31)と日常、親が行なっている行為を見て学習し、子ども自身が行動を先取りしていると考えられる。

## (3) ラバン理論からの分析

第二期調査を加え、母親の記述による子どもの

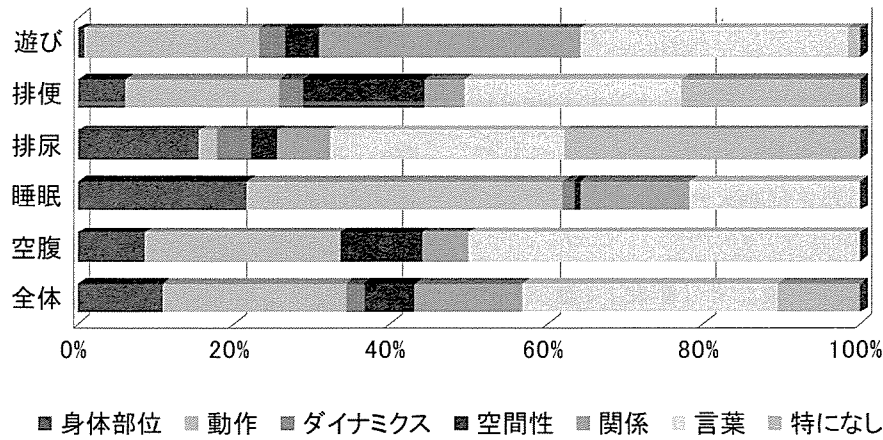
身体表現をラバン理論より分析し、母親がどのような視点で子どもの欲求を理解しているか検討していく。ラバン理論では、動きを5つの視点から分析し、視点項目は、何を?(身体部位)、どんな?(動作)、どのように?(ダイナミクス)、どこで?(空間性)、誰と?(関わり)の5カテゴリーである。これに「言葉」と「表現しない」を加え、7カテゴリーに全ての自由記述を分類した。分類の詳細は、身体部位が記述されているものは身体部位へ、また「部屋のすみ」や「玄関」など特定の場所を示す記述は空間性に分類した。またダイナミクスとは、時間性、力性など動きの様子がわかる記述とし、「ぐずぐず」や「もじもじ」など時間に関わるものや「ドタバタ」「静かに」など力性に関わるものを分類した。さらに、関係については、「(母親の所に)持ってくる」「引っばる」など直接的に子どもが母親に関わる内容の記述とした。

全記述件数554件に対する各カテゴリーの比率(全体)と、欲求場面ごとに各カテゴリーの比率を算出し、図2に示した。

空腹では、言葉による訴えが50.0%であり、動作25.0%、空間性が10.3%、身体部位8.6%であった。「特になし」という記述は1件もなく、空腹に関しては、子どものメッセージをしっかりと受け止めていることがわかる。睡眠は動作が40.3%であり、次に身体部位と言葉が21.6%、関係が16.2%であり、空間性やダイナミクス、「特になし」はほとんど無かった。

排尿、排便については言葉が30.0%、27.8%と最も多く、「特になし」がそれについて37.8%、22.7%であり、この2項目で半数を超す。特に排尿については、子どもたちの動作から母親が敏感に感じ取っていかうとする傾向は感じられない。また子どもも高機能の紙おむつにより、不快感がなく、特に動作での表現が少ないことも考えられる。遊びについては、言葉が34.2%であるが、次は関係33.3%であり、母親との関わりを積極的に子どもが求めてくることによって理解しているといえよう。

空間性に着目して子どもの欲求を理解している



小数第二位四捨五入

図2 欲求場面における表現の割合

のは、空腹と排便である。全体を通して、すべての欲求においてダイナミクスに関する記述が少なく、動きの強弱や速さなど、動きそのものの質からはあまり理解していないのではないかと推察される。

そこで、カテゴリーごとに具体的な記述内容を検討していく。

①「身体部位」

「空腹」の場面では「口の中に手を入れる」「おなかに両手をあてる」など身体部位に触れるものであった。「睡眠」では「目をこする」が21件と最も多く、「右人指し指、中指2本を口でちゅうちゅう」のように詳細に部位を記入した例もある。「排尿」「排便」では「おしりをさわる」が各4件で、身体部位を「おさえる」「たたく」などもあるが、件数は少ない。「遊び」についても身体部位の記述は1件のみであった。

②「動作」

各場面に共通して「泣く」は認められる。「空腹」場面での「食べるマネをして～」「コップで飲むジェスチャー」「自分でおままごとをしてお

料理パクパク」や「遊び」場面で「クローゼットの前で「あけて～！」というしぐさ」など、象徴的な身振りもあった。

また物を利用して表現することが多く記述されている。「空腹」では冷蔵庫や食べ物、「遊び」ではおもちゃや本、くつなどがあげられていた。「睡眠」の場面では睡眠儀式に必要なタオルや靴下が多い。12ヶ月以上の子どもと母親の間では、三項関係が成立している月齢であり、物を介して表現することは母親にとって非常にわかりやすいメッセージであると考えられる。

③「ダイナミクス」

動きのダイナミクスに関する記述は全体でも2.3%と非常に少ない。「睡眠」では「ぐずぐず」、「遊び」の場面では「静かに」、「排便」では「とっても真剣」などであった。乳児期には、たとえば突然激しく泣き出すと、何か異変や痛みがあるのではないかと心配し、断続的に弱々しく泣いている場合には、甘えたいのか、抱かれないのかと判断する。つまり母親は時間性や力性も含め、ダイナミクスを意識して察知し、子どもの欲求に対応

していると考えられる。しかし、幼児期に様々な動きを獲得し、言語でもコミュニケーションができるようになっていくと、母親は子どもの動きからダイナミクスまで意識して読み取ろうとはしなくなるのではないかと推測される。

#### ④「空間性」

空間性の記述は「空腹」と「排便」「遊び」にのみ記載が多い。「空腹」では直接子どもが冷蔵庫の前やキッチン、テーブルなどに行く内容であり、同様に「遊び」も玄関に行くことで、外で遊びたいことを伝えている。こうした直接的な空間の移動は非常に母親にもわかりやすい。

また対照的に「排便」は、物影や隅に隠れることが多く指摘されており、多くの母親が隠れる行動が「排便」を表すと考えていることが特徴である。ルイス (Lewis) によると、「恥ずかしさ」「罪悪感」「誇り」などの感情の分化は他者が自分に何を期待しているかによる。2歳になる頃から、他者の期待と自分の行動を比べて複雑な感情を抱くといわれている。しかし、2歳以前の幼児でも「排便」については、他者を避ける行動をとり、恥ずかしさを感じているのではないかと思われる。

#### ⑤「関係」

記述が多いのは「睡眠」と「遊び」であった。「睡眠」については母親へ触れたがり、「遊び」では母親の手を引っぱることが多く記述されていた。両者とも身体接触を子どもが積極的に行うことによって、子どもは欲求を伝えていると考えられる。

#### まとめ

各欲求場面において、該当の身体部位に子どもが触れることや、空間や物を指し示す、直示的身振り、物を利用した表現が多い。つまり身体部位や指差し、具体的な物の介在については、母親もわかりやすく、どの欲求場面においても母親が子どもの欲求を理解する視点として共通性があると考えられる。

これに対し、各欲求場面における固有の表現もある。食べる模倣動作など象徴的身振りがみられたのは「空腹」であり、この他の場面で象徴的身振りはほとんど記述されていなかった。「睡眠」

では「横になる」「暴れだす」と両極の動作があげられるのに対して、「排便」では「物影に隠れる」という空間性に関わる記述が多い。また「睡眠」「遊び」については親との関わりを求める身体表現が特徴といえよう。

ラバン理論の動きの視点を援用することにより、母親が受けとめている子どもの身体表現の傾向が鮮明になった。つまり、子どもが該当の「身体部位」に触れる、特徴的な「動作」をする、欲求するものがある「空間」へ移動する、「関係」を求めることは、母親にとって、とても理解しやすい子どものノンバーバルな表現であった。一方、動きの時間性や力性から生まれる表現的な質「ダイナミクス」に関する記述は非常に少なく、子どもの動きの様子から感じとることがあまり行われていないのではないかと推測された。

以上のように、幼児期の身体表現は欲求の場面に応じて一定の傾向がある。こうした傾向を母親に伝えることによって、子どもの身体表現によるノンバーバル・コミュニケーションについて、より一層の理解を図ることができるのではないだろうか。今後はさらに情動の理解を検討し、母子間の身体表現による豊かなコミュニケーションの示唆となる資料を作成していきたい。

本論文は、日本保育学会第60回大会での口頭発表を元に、新たなデータを加え、考察したものである。

#### [引用・参考文献]

- 小原倫子 (2005) 『母親の情動共感性及び情緒応答性と育児困難感との関連』 発達心理学研究第16巻2号
- 柴真理子 (1997) 『身体表現』 東京書籍
- 喜多壮太郎 (1997) 『子どもたちの言語獲得』 第3章身振りと言葉、小林春美・佐々木正人編著、大修館書店
- Marion Gough (1993) "In touch with dance" white-thorn books, p7
- Michael Lewis (1997) 『恥の心理学：傷つく自己』 遠藤利彦 他訳、ミネルヴァ書房

表1 母親の記述に見る子どもの欲求表現  
(回答者数 92 名、記述件数 554 件)

( )内数字は、同一内容の件数

	① 空腹	② 睡眠	③ 排尿	④ 排便	⑤ 遊び
身体部位	口かお腹に手をやる	目を閉じる	おまたをおさえて「おしっこでる」と言う (5)	おしりをさわる (4)	「これできたよ」「見て」とか私の目を自分にむけてほしいという表現をしてくれます
	「お腹すいた」と言いながら、お腹をさする	目をこする (21)	おしりをさわる (4)	オムツをたたく (2)	
	お腹をおさえる	鼻をこする	おまたをボンボンとたたく (3)	赤いお顔でいきんでます。目があうと知らんぶり	
	何かを口に入れたがる	親指をしゃぶる (3)	オムツをさわる		
	指を指す (2)	耳や目をいじる	ちんちんを指す		
	指をしゃぶる	指をなめる			
	ママ、ママ〜と叫び、口の 中に手を入れる	右人差し指と中指 2 本を 口でちゅうちゅう。			
	おなかに両手をあてる				
	手を出してちょうだい				
60	10	29	14	6	1
動作	泣く (8)	泣く (9)	泣く (2)	ふんばって「うんち」と言う (2)	一人で遊び始める (8)
	冷蔵庫を開ける (5)	布団に横になる (6)		中腰姿勢でりきむ、りきむ (3)	泣く (3)
	言葉と勝手にお菓子などを開けて食べてます (2)	お気に入りのタオルを探す、持ち出す、欲しが (6)		ふんばっている	走り回る、一目散に走っていく (3)
	手で食べるマネをして「あむちょうだい」「あむしたい」と言います (2)	床や布団の上をゴロゴロ転がる (6)		しゃがみ込む (2)	靴をはこうとする (2)
	お茶の時はコップで飲むジェスチャーで教える	ぐずる、甘える (5)		泣く (2)	靴をはいて、玄関で待つ
	テーブルの上をチェック 自分でおままごととして料理バクバク	あくび (4)		足を交差させて部屋の角などに行く	窓から外を見る
	ご飯の時に使う椅子を出してくる (2)	機嫌が悪くなる (2)		動きが止まって一点を見つめる	「遊びに行く」と言って外に出たがる
	食べたい物を指さす (2)	イライラしてわけがわからない行動をとる		NHKの「ばんつばんくろう」の歌を歌う	あばれる
	食べ物に手を出す (2)	暴れだす		本を見ながらじっと座りこむ	出かけたときには、自分からTVを消したり、こたつのコンセントを抜いたりする
	テーブルに座る	おこりやすくなる		う〜んと唸る	外を指差す
	食卓をのぞく	限界がくると、ちょっとあばれちゃったりして大変です		じっと動かなくなる	「おそと」とジャンパーを指差す
	ぐずる	指しゃぶりしながら、「眠いの」と言う		だまる	くつをはいて帽子をかぶって準備します
	機嫌が悪い	靴下を脱いでゴロゴロ…… ぐずぐずごろりんこする		ズボンを下ろして教えます 終わってから「トイレ」と走っていく	おもちゃ箱を開ける おもちゃを出したい時はクローゼット前で「あけて〜!」というしぐさ
		タオルを持ってゴロゴロ タオルちゅっちゅ くつ下かたてに指しゃぶり 指をしゃぶる、横になる、一人で寝る 座布団を運んできてその上に寝転びます 「ねんねんこっこよ」とごろんと転がる 寝そべる 眠いのをがまんして起きてます			
130	29	54	2	19	26
ダイナミクス		ごしごしと手をグーにして目をこする ぐずぐず	もぞもぞしてトイレに行く もじもじする (2)	お腹が痛そうに寝ころぶ とっても真剣!!	ドタバタはねる ハイテンションのおたけび〜〜
			おちつきがなくなる	「やっやっ」とかげにかかれる	1人で静かに遊んでます 全身で飛びはねるように遊びたいものを体で表現、訴える
13	0	2	4	3	4
空間性	冷蔵庫や炊飯器の前に行く	まくらなどを寝る場所に持っていく	トイレへ向かう (3)	誰もいない部屋や静かなところ、物影に隠れる (5)	玄関に自分のバックを持っていく
	冷蔵庫の前で泣く			じっとしている	おもちゃの所へ行く
	食べ物のある所に行く			きまった場所に行き、しゃがむ	くつをはいて玄関で待っていたりする
	台所に来て、何かを物色したりする			はじっこでうなってる	「表」に行きたがる

	① 空腹	② 睡眠	③ 排尿	④ 排便	⑤ 遊び
空間性	キッチンに入る 冷蔵庫の前に立つ 台所に行く テーブルに寄ってくる テーブルに座りにきて、食べ物を持っている お菓子、果物がある所がわかっていて、そこへ行って欲しが 「マンマ食べる」と言ってキッチンに行く 冷蔵庫の前に行き、「ともちゃん、おなかすいた」			トイレに行く 部屋のすみにかくれてかたまっています 力を入れて、見えない所に行ってしまう 物かけやイスにつかまり、りきむ すみに行く 人から離れたところへ行って立ちながらして 狭い所に入り込んだり、つかまるところを見つけてする	外へ出たい時は玄関でさわぐ
36	12	1	3	15	5
関係	おちゃわんを持ってくる 「抱っこして」とか「おんぶして」とか言って冷蔵庫へ連れていく 食べたい物を持って私に差し出す 「ママおいでえ」と冷蔵庫へ連れて行く 私のまわりにつついてきたり、何でも口に入れようとする 泣きながら母を見る 空のお皿を持って来る	抱きついたり、おんぶしてほしいとせがむ (5) おっぱいを欲しが (5) 私の体 (おなか、おっぱい) をさわってくる (3) 布団やまくらを持ってくる お気に入りの赤いタオルを持ってきます 自分のことすべて母親にして欲しが ママべったん タオルをもって「ママいっしょ」とソファにさそう 「お母さん、ネンネの時間」と言って一緒に寝るように布団のとこへ引っ張って行く 「お母さん寝て」と言う	「ちっち」と言ってオムツを持ってくる (2) ママをトイレに誘います 母のトイレについてきて「座る」と言うが、尿意に 関係ない 気が向いた時はオムツを持ってくる かえたおむつを運んでくれる、「重いね」と言うときも	オムツを持ってくる (3) オムツとおしりふきを持って来て横になる (2)	おもちゃや本を持ってくる (14) 手を引っぱって連れていこうとする (13) 手を引っぱって遊びたいとか、一緒に遊ぼうとか言いに来てくれます (4) 靴を持ってくる (2) 足にまとわりつく 抱っこをせがむ ママと一緒に手を引く 寄ってくる 「お母さん遊ぼうよ」と誘ってきます。(服を引っ張って連れて行かれます) 手を引っ張ったり、「見てみて!」と言う
75	7	19	6	5	39
言葉	「お腹すいた」と言う (22) 「ごはん」「まんま」「～食べる」などと言う (19) 「ちょうだい」と言う (9) おかしとか言葉で言う (3) 「冷蔵庫見る」と言う 「ポンポンたー」 「ジュースのみたい!」と言う 「なんか飲む?」と聞いてくる 「お母さん、ご飯の時間だよ」と言って朝、起こされます	「ねんね」「ばいばい」などと言う (18) 口、言葉で言う (5) わけのわからないことを言い出す おしゃぶりがとれず、「チュウチュウ」が欲しいとか、「自分のまくらとタオルがほしい」と言う ふとんで寝ると言う 「ねんねっこになっちゃったあー」と言う 「ねんね。お布団」と言いながら、ゴロンと横になる ママねんね。タオルと言ってハンドタオルを欲しがります。タオルは何でもいいのですが、こだわりがあって、ダメだしされる時もある	「おしっこ」と言う (10) 「出た」「おしっこ出た」(6) 「しーしー」 出た後で「気持ち悪い」と言う 「し〜」と言った後にオムツにしてしまう 「じょーじょーでたー」言いながらして 「おしっこでる」と言ってくる 家にいると 80%は教えてくれる。「おしっこ」「うんち」と言う…… 外に出るとまったく教えず	「出た」と教える (10) 「トイレ」「うんちしたい」と言う (5) 言葉 (2) 「してしまった」と言ってくれます (2) 「くさい」 出た後で「気持ち悪い」と言う ちっちでたー おむつにする事が 80%出たから教えてくれる たまにトイレで出来る	「あそぼう」「おんも行く」と言う (19) 「あれしたい、これしたい」(10) 言葉 (3) 「くっくはく」 おもちゃを持ってきて「あけてー」と言ったりする。 本を持って「読んで」と要求する 手をひっぱって「ててつなごー」 好きな友達の名前を繰り返してさいそくしたりする 「ママ、一緒に遊ぼうよ」「ママ、一緒に遊んで」と言う。(パパ、お友達の名前、じいちゃん、ばあちゃん) おもちゃをもってきて「これであそぼうよ」 「ママあ」と呼ぶ
181	58	29	27	27	40
なし			まだ教えない (23) ? (4) 特になし (3) まだおしっこの感覚がわからず (2) まだおむつにしてそのまんま……。	まだ言わない (20) だまっていることが多い ?	まだよくわかりません なし
58	0	0	34	22	2



# Mother's ability to understand their children's non-verbal communication about their desires

TAKANO Makiko

## Abstract

Kita (1997) shows that children's communication develops from virtually nothing at birth to verbal communication, with intermediary stages of non-verbal expression combined with verbal expression. However, if a parent cannot understand what a child's actions mean, the communication attempt fails. This study suggests that parents do not understand a significant amount of their children's non-verbal communication. 92 mothers were surveyed about their 4 month-34 month old children regarding the children's behavior when they desire to eat, sleep, urinate, defecate, and play. Their descriptions were classified into 7 categories (body parts, action, dynamics, space, relationship, verbal, no-expression) which were adopted from Laban theory. Results for the mothers' ability to recognize children's desire to eat [action (25.0%) space (10.3%)], sleep [body parts (21.6%) action (40.3%) relationship (14.2%)], urinate [body parts (15.6%)], defecate [action (19.6%) space (13.3%)], and play [relationship (33.3%) action (22.2%)] were found significant. In all categories, mothers were not able to understand their children's desires by dynamics. It was found that children can easily communicate with their mothers by doing things such as touching their bodies, pointing at things they want, or bringing something to their mother. However, especially in case of urination and defecation, mothers depend on verbal communication.

Key words : non-verbal communication, mother and child, desire, Laban theory